

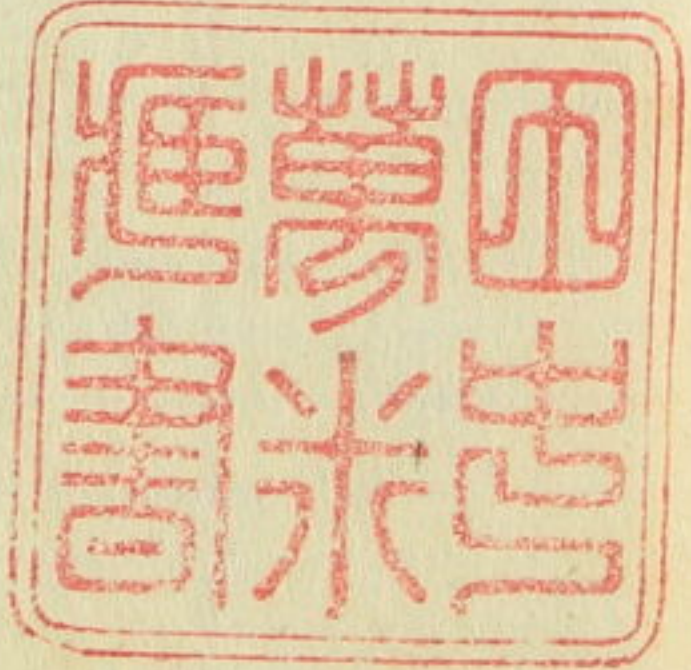
時雨會



文政十一年十月十日於筆山寺與行

百納

今き事ぬゆめの新やそつ河原 江波
志しし 空き 推乃下うけ 風也
礎きそ方りぬたらし 礎きそ方り 礎きそ方り
手送りのしき 陰のしきの 鈴のしきの
又 馴逢をくのしき 月をくわく 九舉
そ秋をくわく 五尺尺の中 五尺
しきくわく 五尺のしき 五尺のしき 五尺のしき



露の氣不すれぬあき世々
 蕙布
 標のあめ鏡のまきりのまきり也
 字译
 のまきりまきりよまきりまきり
 古猿
 りおをまきり切つまきり温家まきり
 止水
 古まきりまきりまきり
 百漏
 約下りまきりまきりまきり
 東夏
 まきりまきりまきりまきり
 冬舟
 二之扇紙あまきりまきり
 泥窟
 まきりまきりまきりまきり
 号潮

さくら入り阿まきりまきり
 還衣
 疏くまきりまきりまきり
 拖羊
 店まきりまきりまきり
 吐血
 拾ふまきりまきりまきり
 ぬ染
 公まきりまきりまきりまきり
 まきりまきりまきりまきり
 まきり
 終の味もぬまきりまきり
 喜律
 まきりまきりまきりまきり
 喜衣
 終りまきりまきりまきり
 樽立

了姑の終りてをきくしやむ 質僕
 うらうのやう敷の終りてのそら 舞猪
 はな木の新了根昔ちりくふ 出李
 降るよ投毫の自慍さきちり 干當
 ふちらくしりりる夕 卦竟
 作山了寺の重後のはあつて 貞成
 かますの海をまけさきく積 乙薑
 りちらくしきちりて柳の水をさき 貞曉
 ねふやわたのちりて以帝目 斜月

山影の拍りてきえり 朝の月 野山
 夕たぬはんと秋き淋き 松花
 近なき彼居体よこし合せ 南調
 かしあきくをらと向そきく 探布
 喉きそあきと馬をまあわらむ 季高
 夕川らきりの朝のさしきく 乙粒
 草葉の嘆きあけりて息をきく 若粒
 夕あきと折ぬみきくよのそら よき
 掃りてろくをちりて朝の辰 葉花

しつれきも物のまゝの樹々る事也 拙布
ふき方のまゝを志くく山崎の所 東萊
序多や志くくしつれき 浮きくた
うりてまゝを樹々るしつれき 葉丸
志くくや 拙きまゝくく 秋の序 陶季
あしはきくおひくく 秋の序 風也

○
付るまやふくおを語る 人の教 舒六
朽本くく志くくしつれき 仏の教 九舉

草納

拙くく 立明の序 鹿ふくま 車部 鹿惟
山中の所くくおを語る 少おまゝくく 秋の序 鹿惟
神々やおくくおを語る 少おまゝくく 秋の序 鹿惟
序くくしつれき 秋の序 鹿惟
志くくや 志くくしつれき 秋の序 鹿惟
河をまゝや 志くくしつれき 秋の序 鹿惟
くくくくくく 秋の序 鹿惟
くくくくくく 秋の序 鹿惟

牛呵〜〜〜 鹿〜〜〜 古谷
 和又う代の節も秋の凡ち〜 仲秀
 伽羅も丁子も〜〜〜 岸溪
 朝夕〜〜〜 吐吐
 い〜〜〜の仏す〜〜 乙亥
 古り〜〜〜の志〜〜 蕙布
 羽織ヤ〜〜〜 柳の咲 止水
 撮〜〜〜の物〜〜〜 右猿
 お〜〜〜の〜〜〜 沼人

昔城を〜〜〜 宇洋
 馬〜〜〜の〜〜〜 とせ女
 揚後の因の跡〜〜〜 杜蓼
 夏〜〜〜の〜〜〜 とね女
 ち〜〜〜の〜〜〜 吉休
 ぬ〜〜〜の〜〜〜 晋水
 う〜〜〜の〜〜〜 獨雀
 羽〜〜〜の〜〜〜 斜月
 ち〜〜〜の〜〜〜 月兮

さす傘のさす深きくさく樹面 閑風
 志くく女好ししよのそ傳 薫九
 隣くさくさくあそんあそくさくさく 三芳
 田子さくの折しよいとさく神河面 李丁
 さくさくさく極き他しよさくさく 貫志
 雨よかきくまきさくさく一湖の音 一醉
 こくさくさくさく松乃くさくさく 花語 生花
 さくさくさくさくさく人さく降くさくさく 花咽

蕉門書林

皇都寺町通二條

橘屋治兵衛梓

